

エムポックス(サル痘)について

～アフリカで感染拡大し、世界で最近注目され始めている感染症～

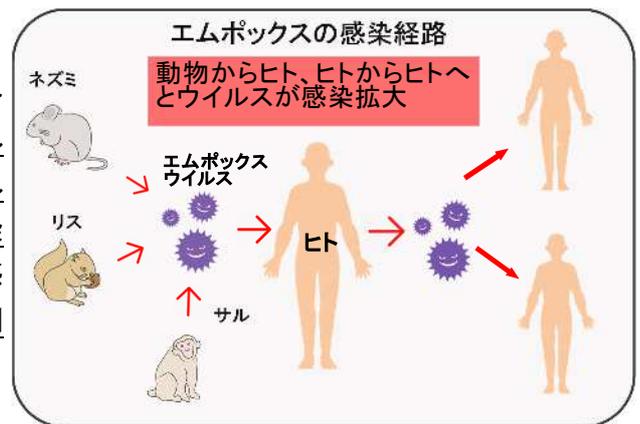
エムポックス(旧名称:サル痘)は、アフリカで発生した感染症です。2022年には世界的な流行を引き起こし、世界保健機関(WHO)が同年7月に緊急事態宣言を発表しました。そして2024年8月、WHOは再びエムポックスがアフリカから世界に広がりつつあるとして、2022年に続いて、2回目の緊急事態宣言を発表しました。今回は、最近注目されている感染症「エムポックス」についてご紹介します。

【エムポックスとは?】

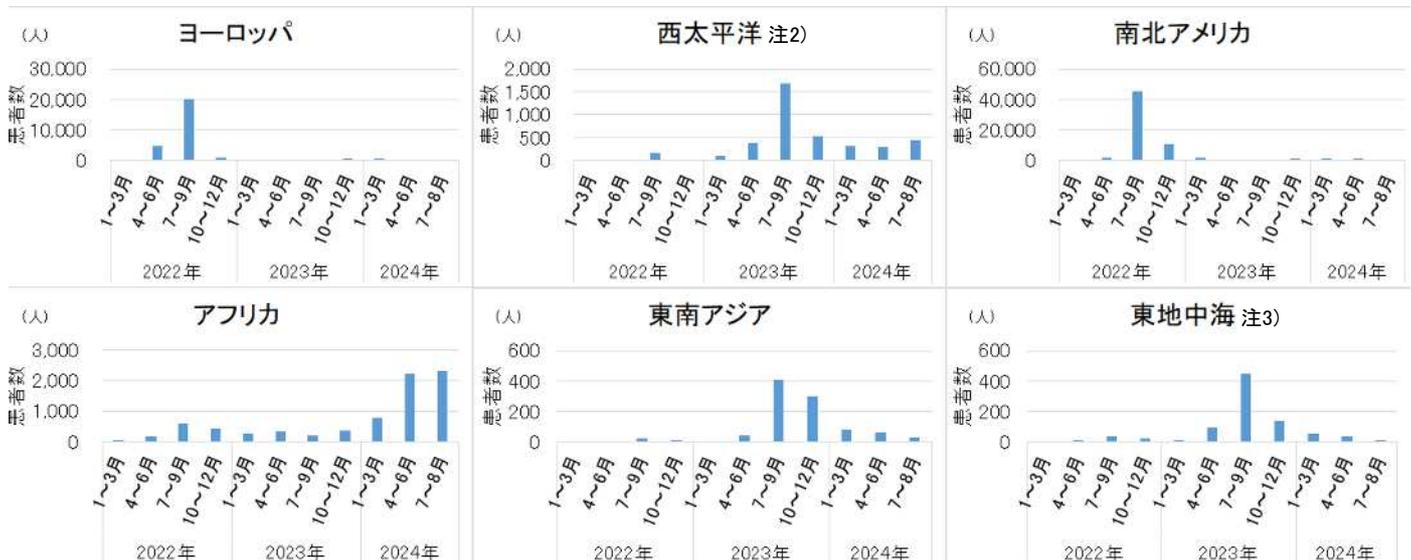
エムポックスは、オルソポックスウイルス属のエムポックスウイルスによる感染症で、コンゴ盆地型(クレードⅠ)と西アフリカ型(クレードⅡ)の2系統に分かれます。コンゴ盆地型に感染した場合の死亡率は約10%であり、西アフリカ型に感染した場合の死亡率は約1%と報告されています。エムポックスの病原体であるエムポックスウイルスは、もともとアフリカのネズミ・サル・リスなどの動物に感染していたウイルスだと言われています。

【感染経路等】

エムポックスウイルスを保有する動物との接触によりヒトに感染します。また、患者の皮膚・粘膜などから直接感染したり、患者の使用物であるタオル、寝具・衣服などから、もしくは患者の飛沫でエムポックスウイルスが体内に入り感染することが考えられていますが、新型コロナウイルスほど感染力はありません。男性同性間の性的接触による感染例が多いと言われています。



エムポックスの各世界地域の流行状況(2022年から2024年8月)(患者数) 注1)



注1)患者数には死者数を含む 注2)日本は西太平洋に含む
注3)東地中海はエジプトなどの一部アフリカを含む中東地域

WHOのWebサイト https://worldhealthorg.shinyapps.io/mpx_global/ のデータを使用

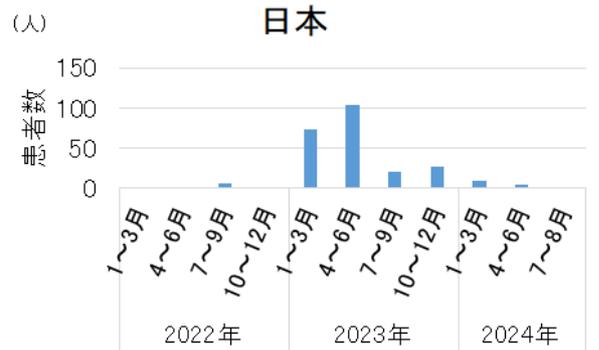
【世界での流行状況】

エムポックスは1970年にアフリカの旧ザイール(現在のコンゴ民主共和国)においてヒトでの初めての患者が確認されました。以後中央アフリカから西アフリカにかけて流行していました。2022年から世界中で感染拡大が起こり、南北アメリカ地域・ヨーロッパ地域などで流行が始まりました。2023年秋以降、コンゴ民主共和国においてコンゴ盆地型の大規模な流行が発生しており、WHOは今後さらに患者数が急増し、エムポックス感染が再び全世界に広がると懸念しています。なお、患者の約96%は男性で、18～44歳の男性が約80%を占めていますが、女性の患者も発生しています。

日本では、2023年に入ってから患者数が増加し、225人の患者が発生しました。2024年は8月までで、患者数は16人です。日本では女性の患者は1人だけ発生しています。なお、コンゴ盆地型の患者はいません。名古屋市では、2023年は3人、2024年は9月に初めて1人の患者が確認されました。

エムポックスの日本の流行状況

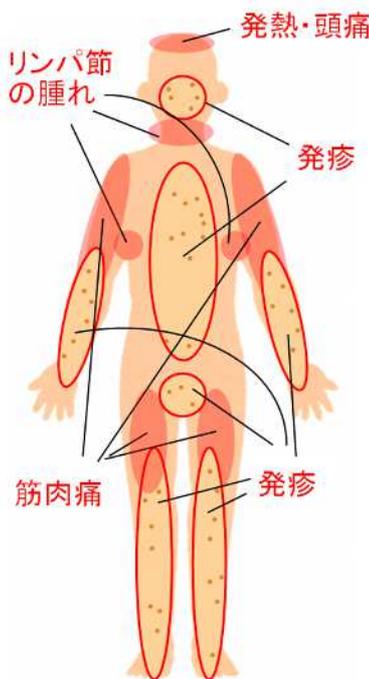
(2022年から2024年8月)(患者数) 注1)



注1)患者数には死者数を含む WHOのWebサイト https://worldhealthorg.shinyapps.io/mpx_global/ のデータを使用

【エムポックスの症状】

エムポックスの症状の図



エムポックスの症状は、風邪のような症状が一般的です。症状は感染してから5日～21日で出現します。感染初期に、急に**高熱**が出る場合があります。発熱と共に、強い**頭痛**が続くことが多いです。他に症状として、**筋肉痛**、**疲労感**、**リンパ節の腫れ**が生じる可能性があります。皮膚の**発疹**がみられる感染症は水痘と麻疹などいろいろありますが、エムポックスでも特徴的であり、**次第に水ぶくれや膿疱に変わることがあります**。性器や肛門の周囲に異常が現れ、顔面と全身に発疹が広がり、見た目も目立ちます。

【予防・治療方法】

流行地ではウイルスを持っている可能性のある動物や患者との接触を避けることが大切です。また、エムポックスの治療では、症状を和らげる鎮痛剤と解熱剤を使用します。対症療法を中心に治療を行います。多くの人は数週間で回復しますが、特に重症化する可能性がある場合は、入院治療が必要になることもあります。特に免疫力が低下している方や、持病がある方は、医師の指導のもとで治療を受けることが重要です。なお、天然痘ワクチンがエムポックスの予防に有効であることが示唆されており、日本でも2022年に承認されています(日本では1976年以降、天然痘ワクチンの接種は行われていません)。

【感染が疑われる場合】

エムポックスが疑われる症状が現れたら、かかりつけ医や最寄りの医療機関に相談しましょう。

エムポックスの感染予防のポイント

- ・男性同性間の性行為、皮膚・粘膜の接触などのエムポックスの感染経路、WHOがアフリカからの感染拡大を警戒していることを知っておきましょう
- ・感染が疑わしい人や患者の皮膚、体液、血液、寝具等に触らないようにしましょう

編集・発行 名古屋市衛生研究所 疫学情報部

〒463-8585 名古屋市守山区桜坂四丁目207番地 電話 052 (737) 3711/Fax 052 (736) 1102

「へるす・りさーち」掲載ページ(名古屋市公式ウェブサイト内)

URL: <https://www.city.nagoya.jp/kurashi/category/15-7-3-9-0-0-0-0-0-0.html>

へるす・りさーち

サイト内検索

2次元バーコード

